

たんの小史

ふるさと端野

②

遺跡から見える古代の端野

(その2)

縄文時代

日本列島で最初に土器が作られたのは約一万三千年前、北九州の人たちがその技術を手に入れたといわれ、北海道で土器が一般的になったのは、おおよそ八千年前のことといわれ、この期の土器には縄目の紋様があるのが特徴です。

縄文時代の文化は、約一万三千年前から約二千年前までの期間にわたっており、古いほうから草創期、早期、前期、中期、後期、晩期に分けられています。

縄文早期、前期

常呂川流域では、早期、前期の遺跡は河口の常呂町で最も多く、北見市(端野町、留辺蘂町も含む)訓子府町でも確認されていますが、数は少なく、遺跡の規模も小さく、定住的な遺跡ではないと考

えられています。

端野では、この時代の石刃が川向で二ヶ所、豊実で一ヶ所発見されています。この地域では海岸部から来た狩人の姿を時々見かける程度であったのではないかと推測されています。

縄文中期

今から約五千年から四千年前が中期になります。この時代の遺跡は、北見地方で四つの遺跡が発見されています。住居には他の地域では「炉」がありますが、ほとんどの住居に炉がないことから、その利用期間は、春から秋までであったといわれています。

縄文中期には、前時代にくらべ多くの人たちが常呂川をさかのぼってきましたが、その生活はわからないことばかりと言われています。

縄文後期、晩期

後期は約四千年前から三千年前といわれており、この期に入ると寒冷気候になります。現在と似たような気候といわれています。

この期から晩期(三千年前から二千年前)にかけては、東日本の人口の減少が

見られます。

この時期の遺跡は、端野町で一、北見市で四、常呂町でも三遺跡程度となっています。

この現象については藤本強先生(端野町の遺跡調査をされた方)は、「後期後葉になって流水がオホーツク海岸に到来するようになり、この地方の人たちの生活基盤を根本的に変えてしまい、大きな人口減少が起きた」と推測しています。

昭和四一(一九六六)年、一区の北川遺跡の発掘調査が行われ、住居址一軒とその脇に墓が一つ発見されました。この遺跡から晩期初頭のものと思われる土器や石器類が出土しました。

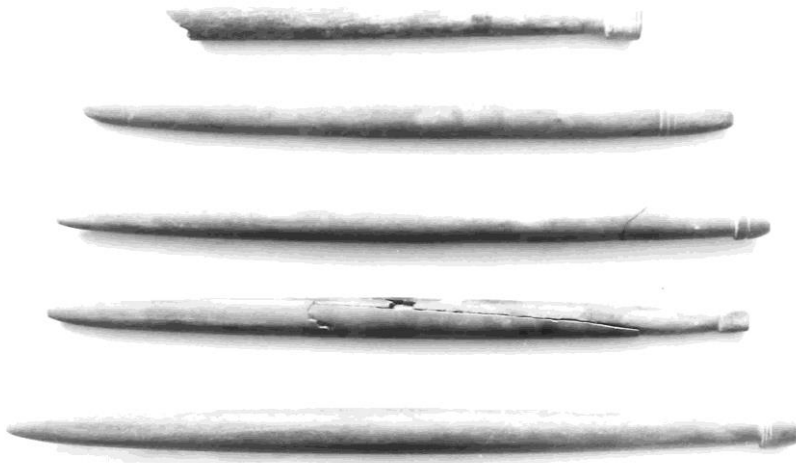
また、発掘の翌年に北川遺跡周辺で開田工事が行われ、この時に石棒(注※1)や磨製石斧、板石が発見され、発掘に当たった加藤晋平先生は、「これらの墓に副葬されていた遺物であり、墓の北側に続く場所の側溝断面で少なくとも五つ以上の墓の断面が確認されていることから、共同墓地と表現してよいだろう」と、「縄文時代のたんの」に記しています。

田中 誠

次号へつづく

(裏面へ続きます)

北川遺跡附近で出土した石棒



注※1
◇石棒

昭和四二（一九六七）年、一区の常呂川沿いの畑を水田にする土木工事の際に北川さよ氏の畑から石棒が発見されました。石棒は最も長いもので五五cm、短いもので四五cmのものでした。（「端野の夜明け」より抜粋）

北川遺跡発掘場所

